

昭和二十年の敗戦は、わが国の全ての産業を崩壊させた。工業も破壊されたし、したがって商品流通も途絶えた。わずかながら統制ルートを通じて細々と食料と日用品が配給されたにすぎない。もとより必要を満たす量で

(一) 敗戦と復興過程の商業

三 戦後川副の商・工業

なかでも「窓の月」の福岡日出磨は昭和十三年中国に進出し、「窓の月蘇州工場」を設立して当時前例のない中国での清酒製造を成功させた。一般に清酒は「不況に強く好況にはさらに強い」といわれる。そして今一つ「戦争にも強い」といえる。度重なる戦乱、戦争を契機にしてむしろその業績を向上させていく不思議な力を備えている。軍需の関係であろう。しかしこの戦争に強い酒造も、敗戦色が濃厚となりあらゆる分野で資材の供給力が衰退していった敗戦直前の数年間は、わずかに細々と工場の火をともし程度にすぎなかった。敗戦は事態をそこまで追い込んだのであった。

いに栄えた。大正期の資料に欠けるが、昭和にはいつてからのこれら三酒造業者の製造高は第4表のごとくであった。販路は広く九州一円、とくに海路で熊本・鹿児島への販売も行われた。「御宴」「窓の月」「栄城」の名は西日本一帯に広くとどろいたのである。

第4表 昭和期川副町酒造の実績

営業主 年代	吉武一郎 (南川副)		福岡浜子 (西川副)		弥富元 (中川副)	
	御宴		窓の月		栄城	
	持越高	製造高	持越高	製造高	持越高	製造高
昭和4年	石 789,486	石 636,199	石 258,020	石 382,432	石 358,149	石 344,420
6年	641,890	636,038	314,430	315,218	451,810	200,316
9年	893,324	1,065,904	356,605	703,308	307,126	393,387
12年	—	1,090,036	—	721,164	—	403,037
13年	—	1,088,432	—	730,964	—	404,933
14年	723,000	583,000	373,000	385,000	299,000	241,000

- (1) 佐賀税務署調べ「佐賀県酒造史」より作成
- (2) 持越高は10月1日現在、製造高は当酒造年度



岸川の三軒を加え計四軒となったが、その後岸川が不況の影響を受けて廃業し、川副では酒造業は三軒となった。酒造業は当時としてはかなりの資本力を必要とし、しかも強い専売制下にあったから戸数はわずかであったが、川副の主力産業といつてよかつた。近隣全てこれ豊富で良質な米の主産地であり、これらを原料とした酒造業は大

高からしめたのであった。今一つは酒造業である。江戸時代に弥富一軒であった酒造業も、明治中期には吉武・福岡・



大きな需要が形成されたことは間違いない。こうしたことを一つの契機にしながら、商業活動も徐々に向上していった。露店やヤミマーケットも栄えたが、しかし情勢が落ちつくと同時に旧商店もささやかな店を開けはじめた。昭和二十四年の暮れには、いち早く佐賀市で三〇〇の中央商店街の店が商店連盟を結成し、歳末大売り出しを行った。商品は乏しかったが、敗戦ショックで火の消えた商店街に一つの活力となった。以後年末・年始大売り出しが各地で景品つきではじまった。景品といっても鍋や釜であったが、人々の顔に明るさがよみがえった。中

商店街

元大売り出しも始まった。そして佐嘉神社・松原神社・肥前神社の祭りも復活し、商店もこれと組んでますます華やかな商業活動がはじまった。花火大会や盆踊り大会が商店街の企画ではじまり、人々は長い戦争の悪夢からやっとさめて、生きる喜びを味わった。

川副商店街の復活は佐賀市商店街の華やかな再出発にやや遅れるが、農漁村部をかかえた強みもあり、昭和二十四年ごろから商店街の復興がはかられた。ともすると祭礼をともなった佐賀市商店街の伝統的な商戦にやや立ち遅れるが、それでもその復興はめざましかった。

川副町自体が農業と漁業を経済の主体とした町であり、川副町商業の趨勢はもっぱらこれら農漁業の浮沈にかかわっている。昭和三十年代の比較的好況期、特に高度経済成長の時期は、もちろんその好況の波にのったわけではないが、比較的順当にその余恵をこうむって上向き運にあ

第5表 ヤミ米価の高騰

(1升当たり、円)

区分	昭和21年1月	昭和22年2月	昭和23年8月	昭和24年7月
公定米価	0.94	22.01	39.90	60.75
ヤミ米価	20.00	30.00	170.00	180.00

昭和25年「佐賀県年鑑」より

はなかった。商店の大半が店を閉じたが、残るわずかな店も細々とこの配給品を扱う程度であった。違法であったヤミの商品が露店に並べられ、ヤミ商人がわずかに活躍した。ヤミ市マーケットが出現した。

わずかに焼け残り生き延びた工場が、軍需を民需に切り替えて生産を再開したが、何分にも資材に乏しく微々たるものであった。鉄かぶとが鍋に化けたり、アルミ板が鍋に化けたりした。しかし国民の大半は失業し戦災にあい、食うや食わずの生活であったから、購買力も知れたものであった。

ただこの時期の一部の例外は、ヤミの農漁産物販売でうるおった農、漁村部であった。国民の多くは飢えに苦しみ飢餓の状態にあったから、食料品であれば居ながらにして飛ぶように売れた。しかもヤミ価格であった。その一例を米でしめすと、昭和二十一年すでに米一升公定で九四銭のものが、ヤミで二〇円した。翌二十二年

は公定価格がひき上げられ二二円に改定されたが、ヤミはすでに三〇円であった。その後ヤミ米は急騰し、公定価格との格差は拡大する一方であった。強権による供出割当制があり、供出は飯米にもくい込む過重なものであったが、ヤミ米はかなり出回った。これは米に限らず全ての農産物についてそうであった。とくに主食代わりになる麦・芋などはもちろん統制下にあったが、かなりヤミルートにのって流れた。こうしたヤミ売りはもちろん一部の農村、一部の農家であったろうが意外の現金収入を生み強い購買力を形成した。昭和二十三年の『佐賀県年鑑』は「農漁村の現金滞貨による購買力に刺激されて、次第に商業活動も上向した」と書いている。農村部に

第6表 昭和37年川副町主要工場

	事業所名	代表者	所在地	資本金	主な製品
食品製造	竹八商店(限)	竹下 八郎	犬井道	160	のり・貝柱・粕漬
	吉武酒造場(限)	吉武 忠夫	犬井道	300	清酒・酒かす
	弥富酒造場(個)	弥富 正也	早津江	—	清酒・酒かす
	原田商店(株)	原田 栄一	小々森	240	醤油・味噌
	松田製麺工場(個)	松田 種次	早津江	—	麺類
	窓の月本店(株)	福岡 日出磨	小々森	450	清酒・酒かす
	内田製粉製麺工場(個)	内田 宗三	犬井道	—	製粉・麺類
	立川製粉・製麺工場(個)	立川 清巳	犬井道	—	〃
	杉野製粉・製麺工場(個)	杉野 傳一	早津江	—	〃
原口製粉・製麺所(個)	原口 幸八	犬井道	—	〃	
製材	中村製材所(個)	中村 モン	早津江	—	板類
	北村製材所(個)	北村 豊次	早津江	—	板類
紙	実松 (個)	実松 正三	早津江	—	祝儀用品
鉄	三崎鉄工所(株)	三崎 八郎	早津江	—	機械部品
製繩	川崎産業(個)	川崎 繁男	犬井道	—	藁繩
	園田製繩工場(個)	園田 六二	犬井道	—	〃
	石井製繩工場(個)	石井 忠六	鹿江	—	〃
	石田製繩工場(個)	石田 健次	犬井道	—	〃
	石井製繩工場(個)	石井 カネ	早津江	—	〃
	杉野製繩工場(個)	杉野 幸一	早津江	—	〃

「佐賀県工場名鑑」佐賀県より

しかし昭和四十八年には第7・8表のように製造・建設部門で業者数がふえている。もちろんかなり零細なものもあり、その後若干の変動もあるが一般的傾向としてふえている。ただ昭和五十年の「佐賀県工業統計調査」によると、町内の事業所数は八十五、従事者は四七九人で年間出荷額は二十二億四千万円にすぎない。一事業所平均で従業者五・六人、出荷高二千六百万円でありかなり零細である。事業所の従業員数でも三人以下が全体の五五・三%、四人以下が三二・九%、十人以下十九人が八・二%、三十人以下五十人が三・六%で、五十人以上の工場はない。産業分類ではいぜん食品関係がも

った。特に昭和四十年代前半は米作生産力が飛躍的に上昇し米価も順当に上がったから、農村部はかなり経済的にうらおった。また漁業も「のり」の好況でわいた。この時期は川副の商店も比較的好況にめぐまれた。しかし昭和四十五年以降米の生産調整がはじまり、農家経済も今一つ明るい展望に欠け、「のり」も生産過剰などでかつての景気を取り戻せない状態にある。こうした農・漁分野における沈滞ムードが、商店街にも今日大きく影響している。その上商店分野における大型化・スーパーの進出があり、今、川副商業はその構造改革に迫られているといっている。

川副町の商業はもとときわめて零細で小資本、家族型店舗が多い。もつと明確に言えば近代化が遅れ、時代的要請に追いつけない現状にある。特に多数の町民が佐賀市や福岡側に通勤しており、その主要な購買力を佐賀市や諸富・柳川・大川の近隣大型店舗に奪われている。自家用車の激増など交通手段の近代化は、ますますこの傾向を強めている。今後川副の商店がこれら町民の購買力を引き留め奪い返すには、大胆な構想による近代化やショッピング街の造成など多大の努力が必要であらう。

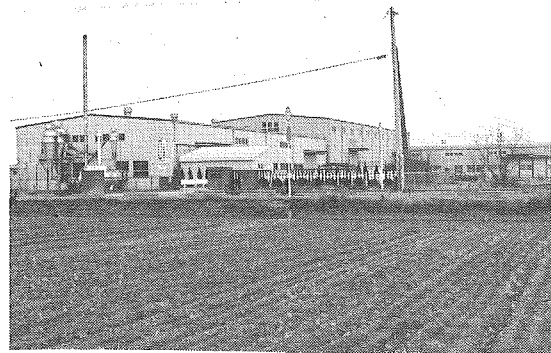
(二) 立ち遅れる工業の進展

また工業についてはやや立ち遅れの状態が続いたが、高度経済成長期以降、その後の誘致運動など景気浮揚策が効を奏し、かなりの企業が町内に定着した。昭和三十七年の「佐賀県工場名鑑」によると、この段階ではまだ食品製造・加工業が主体で、そのほかわずかに製材・製繩・それに一つの鉄工所を数えるにすぎなかった。(第6表)

第8表 昭和48年川副町の建設業

名 称	代表者名	所在地	従業員数	業 種
山 本 建 設	山本 一己	犬井道 334	12	一般土木建設
江 頭 建 設	江頭 栄	犬井道2142	4	一般土木建設
江 頭 建 設	江頭 恒哉	早津江津 145	5	建築工業
高 祖 建 設	高祖 一夫	鹿江9946の3	11	建築工業
高 森 組	高森 保	早津江1428	6	建築工業
	渋谷 忠一	福富12の4	8	左官工事
	中川 岩男	早津江津 462	3	左官工事
元 村 鉄 工 所	元村 勝	早津江1089	5	鉄骨鉄筋工事
	大塚 千年	早津江津92	3	石工業
岸 川 電 気 工 事 店	岸川 昭二	早津江津 154	16	電気水道工事
早 津 江 鋳 金 工 業 所	袋 洋	早津江津 287	7	鋳金業

「佐賀県商工名鑑」1973年より



町内への進出企業

立地条件を逆にした新しい創造的業種を主体とした産業の調和ある発展が期待されるのである。

また家具製造の進出もめだつてきた。本町産業の主体は今後とも農業と漁業であるが、これらを支え補うものとして商・工業の発展も重要な存在である。今後とも農漁業の近代化が進むとすれば、それによる余剰労働力吸収の問題もあり、自然環境をそこなわない農・工併進的な地元企業の発展は欠かせない。立地的な問題もあり多くの困難があるが、しかし一面ではその立地条件を逆にした新しい創造的業種を主体とした産業の調和ある発展が期待されるのである。

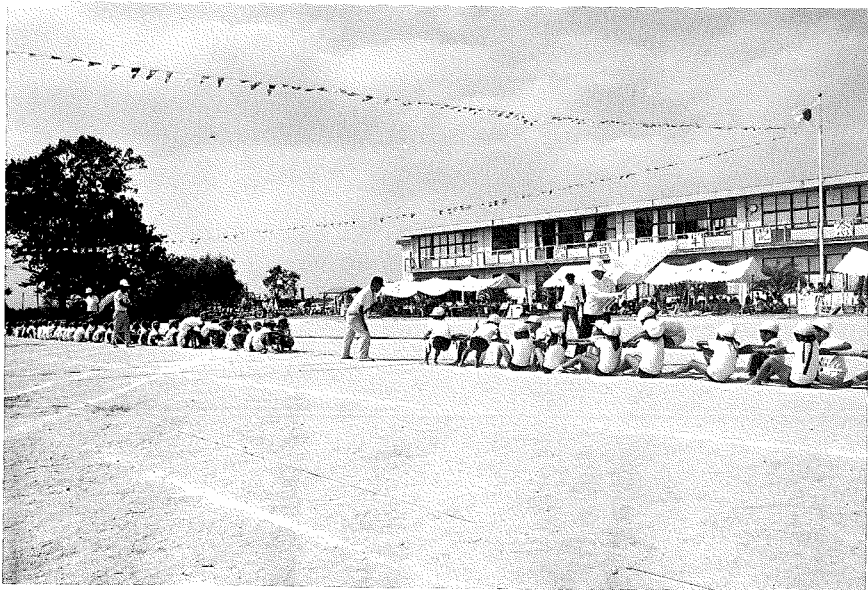
第7表 昭和48年川副町の製造業

名 称	代表者名	所在地	従業員数	業 種
江 頭 食 品 本 舗	江頭 勇	犬井道 685	5	水産物加工
川 原 食 品 (株)	川原 直	犬井道 635	32	水産物加工
竹 下 伊 作 商 店 (株)	三木 聡彦	犬井道 918	8	水産物加工
(株) 竹 八	竹下 八郎	犬井道 919	50	水産物加工
(株) 原 田 商 店	原田 トモ	小々森 650	11	醤油・味噌
杉 野 製 麵 所	杉野 傳一	早津江津 310	3	製麵
立 川 製 麵 所	立川 清己	犬井道 723	6	製麵
原 口 製 麵 所	原口 米司	犬井道	4	製麵
(株) 窓 の 月 本 店	福岡 日出磨	小々森 691	8	清酒
吉 武 酒 造 場	吉武 忠夫	犬井道 735	9	清酒
(株) 寿 の り	西村 寿夫	小々森	14	味付海苔
前 田 の り	前田 繁	鹿江 621	13	味付海苔
吉 田 漬 物 店	吉田 熊太	南里1904	5	漬物
井 手 製 材 所	井手 藤一	小々森 661	5	製材
大 坪 製 材 所	大坪 太一	鹿江 467	4	製材
北 村 製 材 所	北村 豊次	早津江津 457	6	製材
中 村 製 材 所	中村 モン	早津江津	7	製材
古 賀 印 刷 所	古賀 ハマ	鹿江 679	7	印刷
旭 ブロック工業所	西村 律次	西古賀 388	7	ブロック・コンクリート
池 田 製 瓦	池田 正	犬井道 1	8	瓦
川 副 建 設	森永 正幸	早津江1441	11	コンクリート
早津江セメント工業所	荒島 茂俊	早津江津 453	6	ブロック・コンクリート
吉 富 建 材 店	吉富 日出春	西古賀 368	6	ブロック・コンクリート
内 田 鉄 工 所	内田 隆	早津江津 224	3	機械
坂 田 鉄 工 所	坂田 卯八	犬井道 933	7	のり機械
野 口 商 会	野口 袈裟雄	犬井道 28	5	のり機械
野 田 鉄 工 所	野田 初次	西古賀 264	9	のり機械
松 永 鉄 工 所	松永 巖	鹿江1057	3	のり機械
石 井 製 繩	石井 カネ	早津江津 184	7	製繩

「佐賀県商工名鑑」1973年より

つとも多く二十
四、金属製品十
二、家具関係十
一、その他十で
ある。食品関係
はいうまでもな
く水産物の加工
(粕漬・のり・
漬物など)で、
そのほか味噌・
醤油・清酒・製
麵・製菓製パン
などがある。鉄
工所ではノリ関
係の機械部品を
はじめ農具、軽
量鉄骨などがあ

教育



秋季体育大会

- (1) 山田龍雄「佐賀米流通機構の成立過程」農業総合研究所・一九五九年
- (2) 明治四十三年「中川副村沿革誌」
- (3) 明治四十三年「西川副村沿革誌」
- (4) 明治四十三年「大詫間村政一斑」
- (5) 明治四十三年「南川副村沿革誌」
- (6) 「佐賀県産業調査会答申書」昭和十年
- (7)